顧問　新村　出博士訃

昭和36年初夏　自宅 貴和斉に於て

本会顧問　新村　出博士は、昭和四二年八月一七日、九二歳のご高齢をもって、不帰の途に旅立たれた。

博士のご生涯は、国語学、言語学、音声学、そして東西交渉史など新しい学問分野の開拓者の苦悩にはじまり、学界の泰斗と呼ぶにまことにふさわしい大きな業績をうちたてられたご生涯であった。よりながくご長寿を楽しまれるように、との私どもの願いも空しくなったいま、博士のご業績の巨大さを、あらためて痛感するのである。

博士は、明治九年静岡で生まれられた。明治三二年東京帝国大学文科大学を卒業、明治三五年東京高等師範学校教授となり、明治三七年に東京帝国大学文科大学助教授を兼任、ついで、新たに開設される京都帝国大学の言語学講座を担任すべく海外留学を命ぜられ、明治四〇年一月京都帝国大学の助教授に転じ、同年三月渡欧し、四二年四月まで、英・独・仏三ヵ国に留学された。そして明治四二年九月の新学期からは、京都帝国大学文科大学の教授として、新しい国語学の確立をめざす言語学の講義を開講され、昭和一一年の定年退官まで、言語学講座を主宰された。この間、明治四四年いらい退官まで長く京都帝国大学附属図書館長の要職を兼ねられた。昭和三年には帝国学士院会員に推され、昭和一一年七月には勲一等瑞宝章を授章、昭和三一年には文化勲章を授章された。一方、「国文学会」「近畿方言学会」など学会をおこされたのについで、昭和一三年には「日本言語学会」を全国に主唱して創立され、会長に就任され、学会の運営にも大きな努力をはらわれた。

ヨーロッパの言語学方法論を導入して、新しい国語学の確立を目ざされた博士のご研究が、多方面に大きな業績をのこされたことは、ここに申すまでもない。『東方言語史叢考』『東亜語源誌』『典籍叢談』『国語問題精義』『国語学叢録』『南方記』『正続南蛮広記』『海表叢書』、さらには『言林』『広辞苑』など博士

の編著書は枚挙に遑ないが、博士の国語学研究の大きな特色の一つは、歴史主義をとり、史的研究の方法を言語学研究の上に導入されたことにあった。日本史や東西交渉史への深いご造詣が、博士の言語学研究の大きな柱となっているのである。

博士の京都着任の前年に創立されたわが史学研究会が、博士の着任とともに博士のご援助を乞うたのも、博士のご学風からする、いわば必然の帰結であったといえよう。明治四二年、すなわち博士の京都着任の年一一月二八日、京都府図書館で開かれた本会第二回総会の席上、「国語史上の一疑問」と題して、国語大勢の変遷上もっとも重要な位置をしめる東国方言の沿革について、古代から江戸時代までの歴史をたどって講演せられた。その内容は本会『講演集』第三冊に掲載されているが、言語の研究の上に、比較研究とともに歴史的研究の重要性を強調され、その有効性を証された講演であった。講演に先立って、評議員の改選が行なわれ、博士も評議員に選出せられた。ついで機関誌『史林』創刊とともに別掲の通り前後一四篇の論考を寄せられた。近世初頭のキリスト教史や蘭学史など、何れも博士によって開拓された学問分野からの寄稿を賜っている。役員としては、『史林』創刊の年に史学科教官を役員とすることになって一時その任を退かれたが、昭和一三年、ふたたび評議員に復され、昭和二二年にいたった。こうして半世紀の長きにわたって、研究の上からも、役員としても、本会はまことに大きな援助を賜わったのである。昭和二九年名誉会員に推し、昭和三七年制度の変更によって顧問に推したのは、何程かでも博士の御恩に報いんがためであった。

昭和四二年一〇月七日、名誉市民に推されていた博士の京都市公葬が、京都会館第二ホールで行なわれた。安部幸明氏の作曲になる博士の和歌三首

たまきはる　いのちなりとも　この春の
　花をしめでむ　連翹の花

空の青　草木のみどり　尚のこる
　さにはに匂ふ　白芙蓉の花

嵯峨野菊　ひとむら咲きて　わが庭の
　うらがるる秋を　よそほひにけり

がしめやかに合唱され、博士は永遠の眠りにつかれた。なお市公葬にさいし本会を代表して、小葉田理事長より弔辞を捧げた。

（熱田　公）

新村博士「史林」寄稿論文

国語史上の一疑問　「講演集」三
伊勢漂流民の事績　「史的研究」
蘭書訳局の創設　「史林」一の三
和蘭伝来の洋画　二の一
慶長年間の京都耶蘇信徒の墓碑　三の一
京都南蛮寺興廃考　三の三
足利学校の盛時と西教宣伝　四の四
徳川幕府の耶教禁圧と儒者　五の四
青木昆陽伝補訂　八の二
暹羅の日本町（上・下）　八の三・九の一
所謂京都南蛮寺遺鐘の伝来に関する異説　一〇の四
日本と暹羅との貿易につきて　一二の一
貨狄像伝来径路の想定　一三の四
羅馬教皇宛大友宗麟書状に就いて（浜田耕作共著）　一五の四

弔　辞

史学研究会を代表いたしまして、本会顧問新村出博士の霊前に、謹しんで哀悼の辞を申しあげます。

博士が史学研究会のためにつくされました御功績を想いますに、明治四一年本会創設のはじめにさかのぼるのでありまして、博士の幅広い御学問から、数々の論考を本会機関誌「史林」に御寄稿いただき、史学の研究を大いに振興せられました。さらに昭和二二年にいるまで、本会評議員に就任せられ、本会運営のため直接の御尽力を賜わったのであります。

史学研究会が、今日、史学・地理学・考古学の総合学会として独自の地位を保ち、我が国のみでなく世界の学界にその名をはせておりますのは、創設いらい長年にわたる博士の多方面な御助力に依るところが大きいのであります。昭和二九年、本会に名誉会員制度が開かれるや博士を名誉会員に推し、ついで制度の変更によって顧問に推しましたのは、何ほどかでも博士の御功績にお報いしようとしたからに他なりません。

いま博士の訃報に接し、まことに哀惜にたえません。長年にわたる御助力に対し深く感謝いたしますとともに、一同相よって史学研究会の活動を一そうさかんにし、もって博士の御遺志を継承する決意であることを霊前にお誓いして、弔辞といたします。

昭和四二年一〇月七日

史学研究会理事長　小葉田　淳